

# 美術科教育学会通信

1966年10月5日発行

美術科教育学会本部事務局

No. 22

〒184 東京都小金井市貫井北町4丁目1-1 東京学芸大学

美術科教育学研究室内 Tel.0423-25-2111 (内) 2856,2857,2858

Fax. 0423-21-3739

## 「公開シンポジウム」と「研究部会」の在り方について

愛知教育大学 ふじえ みつる

去る8月30日の学会理事会(東京)で「美術科教育学会公開シンポジウム」(通称“出前シンポ”)と「研究部会」の在り方をめぐっての話し合いがあった。

出前シンポについては、1992年11月の東京・池雪小学校以来16回を実施し、さらに17回(福島)、18回(東京)と開催が決まっている。全てのシンポに参加された宮脇代表理事から、制度の枠を離れて手弁当で自由に参加するという体験から得たものは大きい、20回位を目安に見直してもよいのではないかという提案があった。それを受けて、シンポジウムが単発に終わっていないか、地域と学会との繋がりに役立っているのか、多くの人々に美術教育の大切さを理解してもらえる契機になったのか、についての議論があった。

出前シンポとの関連で、研究部会についても話し合われた。部会も、1994年8月にその運営に関する確認が理事会でなされて以来、3年目を迎えた。現在、6つの部会が活躍している。部会が特殊なテーマを設定していることや特定の地域に偏っていることが多いので参加しにくいという意見もあった。また、若手の会員が積極的に部会を作りだしていきけるような配慮も必要だという意見もあった。

いずれの場合も、特に急いで結論を出すということではなく、さまざまな感想・意見を出し合うだけで、明確な方向性というものは出なかった。しかし、学会が惰性に流れることなくその活動を自己検証していくという意味で、こうした話し合いは有意義であると思う。むしろ、総会でこうした話し合いが必要なかもしれない。

以下は個人的な意見になるが、今後の展開の一方としてシンポジウムと部会との結びつきに注目したい。いくつかの出前シンポが、ある部会の公開研究会のような形で開かれている。今後も、部会が中心となって地域や部会の研究テーマに密着したシンポジウムを開催していく方向が見えてきたと思う。また、部会にそのテーマや地域性の偏りがあるとしても、もともと部会は、年一回の全国大会だけでなく、特定の研究テーマや特定の地域で会員有志が集まって研究交流をしたいという発想から生まれたものである。今後は、テーマ性と地域性をクロスしたような形で部会を活発にし、そこでの議論を美術教育運動のエネルギー源としていくことが課題であろう。

たまたま私が所属している「比較思想学会」では、年一回の全国大会と並んで地域単位(県単位、ブロック単位など)の研究例会があり、単なる情報交換ではなく研究発表が中心で、その研究についても10枚程度にまとめた発表要旨が学会誌に掲載されている。また他にもいくつかの活動の方向が考えられると思うが、会員諸氏の提案を待ちたい。

### 《第14回公開シンポジウム「開かれた美術館」の報告書ができました》

上のシンポジウムについてはすでに「美術教育学」(第17号)にその概要を紹介しました。当日の発言内容の他に、参加者の感想・意見、美術館の活動報告などが掲載されています。有志の財政援助で刊行にこぎつけました。ご希望の方は、一部につき送料とも800円(500円の図書券と290円の切手でも可)を下記までお送り下さい。

〒448 刈谷市井ヶ谷町広沢1 愛知教育大学 美術教室 ふじえ みつる

TEL. 0566-36-3111 FAX.0566-36-4338 E-mail mfujie@auecc.aichi-edu.ac.jp

## 美術科教育学会学会史の構想について

茨城大学 金子 一大

この8月30日の理事会で茨城大学の金子と向野康江に学会史（美術科教育学会の歴史）の編纂作業が託され、正式で詳細な編纂内容は3月の総会に諮ることになりました。ただ編纂者としてはできるだけ客観的な歴史にしたいこと、学会員の方々としても総会でいきなり詳細な内容案が提案されても十分な議論が尽くせないと思いますので、ここに編纂者の『美術科教育学会史』についての大雑把なイメージを紹介して学会員のご意見や資料の提供などを期待したいと思います。

まず私の知っている範囲での経過を述べておきます。美術科教育学会の会史を編纂することが去年の理事会で決定され、大まかな目次案も作られました。しかし実際の編纂作業に着手できませんでした。学会事務局が他の仕事で手一杯であったためです。そこで、美術教育史研究部会の拠点でもある茨城大学の金子と向野に編纂作業依頼の打診がありました。両人とも多忙な身で決められた事務的作業はとてできないところから、内容・時間・方法等に関してある程度両人の意向が反映されるなら、つまり美術教育史の調査研究の性格をもたせてくれるならということで引き受けることにしました。そして理事会では以前の経緯との関係で議論となりましたが、最終的に承認されました。3月の総会で内容等の正式提案をすること、第20回大会を目的に編纂あるいは発行することも決まりました。

さて肝腎の学会史内容に関して編纂者の抱くイメージを紹介します。まず学会のやってきたことを考えますと、大会発表や掲載論文審査によって研究の蓄積、研究水準の確立、研究範囲・方法の拡大といった学問・研究史と、部会や公開シンポに代表される運動・事業史的側面があると思います。これはともすると相反する二側面です。例えば、研究水準を上げようとする活動と、広く美術教育研究に関心をもたせる、あるいは学会員を獲得するといった活動は矛盾します。例えば学会誌の水準を上げれば、学会員数、少なくとも学会誌への論文応募は減ります。学会経営的観点から見れば困るわけですが、研究団体としての性格から見れば水準を落としていくのは自殺行為でもあります。美術科教育学会は両価値の間を揺れながら維持されてきたと思います。その矛盾が目立たなかったのは、初期から現在に至るまで時代に敏感に反応した研究発表や事業、つまりジャーナリスティックな方向が評価されてきたからだだと思います。私自身は研究水準を確立する学会として必ずしもそれがよいこととは思っていませんが、この学会の大きな特徴であったと思います。以上を意識した学会の時代区分とそれを踏まえた大雑把な目次案を示しておきます。

1. 大学美術教科教育研究会の時期（1979~82）第1~4回研究会  
大学美術教育学会会場での鈴木寛男の呼びかけ。奈良教育大での30~50名の研究会。
2. 美術科教育学会の発足の時期（1983~86）第5~8回大会  
学会名称の問題。事務局を大阪教育大学に設置。学会員の増加。大学美術教育学会との関係。参加者全員が見える大阪教育、神戸、東京学芸、上越教育大での大会。
3. 美術科教育学会の拡大の時期（1987~90）第9~12回大会  
大学院生等大会発表者の増大。筑波、愛知教育、横浜国立、福岡教育大学での大会。
4. 美術科教育学会の多様化・拡散の時期（1991~94）第13~16回大会  
90.6に事務局愛知教育大に、さらに93.9事務局東京学芸大学に移管。学術会議登録公開シンポと研究部会制度の発足。宇都宮、静岡、京都教育、信州大学での大会。
5. 美術科教育学会理想像の模索の時期（1995~98）第17~20回大会
6. 美術科教育学会の将来
7. 資料  
発表者・題目一覧、学会員数の変化、財政の変化、公開シンポ、研究会等。

## データベース構築部会から

データベース構築部会 上山 浩

### 1. 学術情報センター電子図書館参加について

前回の学会通信(21号)で取り急ぎ概略をお知らせしましたが、本学会として、学術情報センターが進めています電子図書館のプロジェクトに参加する方針が、先の理事会で承認されました。学会誌の電子図書館登録に必要な具体的な手続きとして、論文著作権の学会への移譲が求められます。現在のところ、来年の学会総会に諮るべく学会誌投稿規定の改訂に向けて準備中ですが、暫定的な措置として、現在編集中の学会誌18号については、論文執筆者の皆様、電子図書館への参加と論文著作権の学会への移譲をお願いしているところです。過去の論文の著作権の扱いについては、総会や理事会の決議のみで解決できるのか、過去の全執筆者に了解を取るべきか、意見の分かれるところですが、学情センターに問い合わせたところ、他の学会の対応もまちまちだが、いずれにしても実質的には問題は生じないだろうとのことでした。できるだけ簡素な方法がとれるよう皆様ご理解をお願いします。

電子図書館の正式サービスは来年4月からはじまります。現在参加学会数は40以下と少数ですが、その中には英文学会や仏文学会など伝統のある学会が含まれています。できるだけ早い段階での参加は、この学会にとってメリットとなるように思われます。皆様のご協力をお願いいたします。

### 2. 学会公式WWWページ開設、および有志による研究業績の公開について

公式WWWページ開設および有志による研究業績の公開に関する作業が、データベース構築部会に一任されることになりました。インターネットやWWWにつきましては昨今よく知られるようになりましたし、多くの学会が独自のWWWページを公開しています。本部会でも試験的にWWWページを公開してきました。それをもとに学会公式のWWWページへバージョンアップしようというわけです。

そこで、学会員の皆様から、ホームページないしヘッドロゴのデザインを公募したいと考えています。HTML、画像データ、紙に描いたラフスケッチ、何でもかまいません。11月15日を一応の締切として、下記問い合わせ先(上山宛)までお送り下さい。

データ公開の作業はこの部会で行います。ですが、データ自体は学会員皆様をお願いすることになります。当面は有志の皆様から公開していいという論文や研究報告、実践記録などを募りたいと思います。入力作業の便宜上、以下にいくつかの条件形式を提示しますが、なるべく多くの情報を頂けることを切に願っております。

- ・原則として、MS-DOSフォーマット(IBM ないしはPC-98, 720KB/9)の3.5インチフロッピーディスクに記録されたテキストデータ。電子メールでも受け付けます。
- ・画像の場合はGIF/JPEG, PICT ないしはBMP形式とします。
- ・テキストに画像を独自にレイアウトする場合は、投稿者側でHTMLを書いて下さい。
- ・ビデオ映像は、2分以内に編集されたVHSか8mmビデオテープないしはQTムービー。
- ・原則として基本的なデータ化は投稿者をお願いしますが、特別な場合は部会側で入力することもあります。

投稿・問い合わせ先: 上山 浩(宮崎大学教育学部) 889-21 宮崎市学園木花台西 1-1  
E-mail: e06501u@cc.miyazaki-u.ac.jp TEL: 0985-58-2811 ex. 5424, FAX: 58-2892

## 第18回美術科教育学会公開シンポジウム

第15期中央教育審議会の中間答申（7月19日）によって今次教育改革の方向はみえてきました。そこで、美術科教育学会は以下のような公開シンポジウムを計画いたしました。出来るだけ多くの先生方、父母の皆さん、そしてまた今次教育改革に関心をお持ちの方々のご参加をお待ち申し上げております。（参加自由、無料）

\*テーマ……「教育改革の動向と美術教育」—今次教育改革にいかに対応するか—

\*期 日………1996年12月14日（土）14:00~18:00

\*会 場………お茶の水女子大学付属中学校（地下鉄丸ノ内線茗荷谷駅下車5分）

\*プログラム

1. 総括的報告……中教審の報告をどう読み取るか 新井哲夫（群馬大学）

2. パネルディスカッション……司会 大橋皓也（元上越教育大学）

◎ 教育改革の動向と造形・美術教育

(1) 学校週5日制の完全実施と教科のスリム化をめぐる

(2) 経済同友会の提言「学校から『合校』へ」の問題点

(3) 学校の病理（いじめ・不登校など）の問題と造形・美術教育

(4) 狭窄化した受験知の解体と造形・美術教育

◎ 造形・美術教育の再構築への課題

(1) 造形・美術教育の閉塞状況（内容・制度・教員養成など）をどう再構築するか

(2) 国際化・情報化など同時代的要請と造形・美術教育

(3) 多元分化・伝統文化教育と造形・美術教育

(4) 地域社会・美術館など社会に開かれた造形・美術教育

◎ パネラー

小林貴史（東京学芸大学付属大泉小） 春日明夫（お茶の水女子大学付属中）

柴田和豊（東京学芸大学） 金子一夫（茨城大学）

岡崎昭夫（筑波大学） 新井哲夫（群馬大学）

◎ コメンテーター

宮脇 理（元筑波大学） 花篤 實（大阪教育大学）

石川 毅（東京学芸大学）

### 学会本部事務局より

- 去る5月に、第17期学術会議・登録団体への申請をしましたが、登録された旨の通知が9月上旬にありました。3期連続での登録です。
- 11月に福島大学で行われます第17回公開シンポジウムのために、学術協力財団の補助金を申請していましたが、30万円が交付されることになりました。新しい成果です。
- 第19回美術科教育学会は、鳴門教育大学を会場に、来年の3月26・27・28日の日程で行われます。第1次案内は同封の別紙案内の通りです。第2次案内は12月に送付予定の学会通信23号に同封します。宿泊案内はその時に致します。
- 学会通信20号で、教育改革に伴う「図工・美術科の危機」についての特集を近々組みたいと記しましたが、上記の第18回の出前シンポの開催をもって、それに代えたく思います。悪しからずご了承ください。シンポの様子は学会通信でもお伝えする予定です。
- 学会通信21号で、理事会が8月末に開かれることをお知らせしましたが、本22号の内容は理事会での主要な話題の報告となっています。お目通しの上、ご意見などありましたら、本部事務局までお寄せ下さい。